

新しいステージを生きる場所、見つけました

# 移住先で自らの暮らしを創る喜び

那須のサービス付き高齢者向け住宅に移住した久田恵さん。  
移住してきた人、地元で暮らししてきた人など、さまざまな背景を持った人たちと、  
社会や環境を自ら創る「原っぱプロジェクト」に取り組んでいる。  
それは究極の「自己中心」を生きる場所づくり——。

ノンフィクション作家

## 久田 恵

●ひさだ・めぐみ 2018年那須に移住。20年「原っぱプロジェクト」を立ち上げ、「パベレッタ・カンパニー」を主宰。著書に『母のいる場所——シルバーヴィラ向山物語』（文藝春秋）。『100歳時代の新しい介護哲学』（現代書館）など。

### 新しいステージを那須で

——那須に移住されて三年目だそうですね。

東京で仕事をしていた時に『100歳時代の新しい介護哲学』というインタビュー集を出版したのですが、そのころにさまざまな介護施設や介護職の方を取材していました。現在

住んでいるサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）「ゆいまゝる那須」は、その取材先のひとつ。話を聞いて「面白そうなところだな」と思っただけで移住してきました。

——現役でバリバリ仕事もされているなかで、那須のサ高住に移り住むとは、周囲の方もびっくりされたのではありませんか？  
自分でもびびっています

です。

### 新天地でプロジェクトを始動

「終の棲家」と決めたわけではなく、新しいチャレンジの場として、面白そうだからやってきたと言った方がしっくりきます。

——東京から「撤退」したのではなく、那須へ「進出」すべく移り住んだんですね。どんなところが魅力だったのでしょうか。

那須は、主に戦後、開拓されてきた土地なんですね。もともと住んでいるという人も住み始めたのは戦後です。苦労して開拓してきた人たちだから、移住者に対して寛容で、新しいことを始めたいという人たちが後押ししてくれる雰囲気があります。開拓者精神が生きているんですね。そんな地域の気質も、気に入ったところのひとつです。

また、「ゆいまゝる那須」も自由な雰囲気があって、住民の自治が生まれている。入居者が働くことも自由

実は、この地域で廃校になった小学校を利用して、東京でやっていた人形劇をやるうと思っていました。ところが、テナント制で料金も高く、消防法などの関係で、人形劇に使う幕が使えないといった制約も多かったもので、一度頓挫したことがありました。

東京から運んできたトラック一台分の人形劇の道具を処分する気にもなれず、置き場所を探していたところ、歩いて数分のところにある土地の地主さんを紹介されました。私は東京の感覚で、畳一畳分くらいあればいいかなと思ってたずねてみたんですが、「久田さん、ここで土地を借りるといのは、このあたりを全

（笑）。あまり深く考えなくて、自分の直感を信じて決断してきましたが、悪くはなかったですね。  
日々、ステージを変えていかないと、新しいことにはチャレンジできません。

私が東京から那須に引っ越したことで、「家じまい」「終活」「終の棲家」というようなテーマで取材を受けることがあるのですが、ここを

部借りるといことだよ」と、バツと手を広げて言われたんです（笑）。そして「賃貸料はそっち（私）で決めていいよ」と言うので、恐る恐る「年間一万円だ」と言うと「いいよ」と——。東京の感覚では考えられない話です。

地主さんは戦後、お父さんとこの地を開拓して、その後商社マンとして長く働き、リタイア後に戻ってきた方でした。

元商社マンだからか、「この土地を借りて何をするかプランを立ててプレゼンをして見せてよ」と冗談半分に言うので、私も、ガーデンハウスを二つ作って、ここは野外人形劇場にして……とプレゼンして見せたのです。

こうして思わぬところからはじまったのが「原っぱプロジェクト」です。